

<内>と<外>の間II／T邸

静岡県静岡市

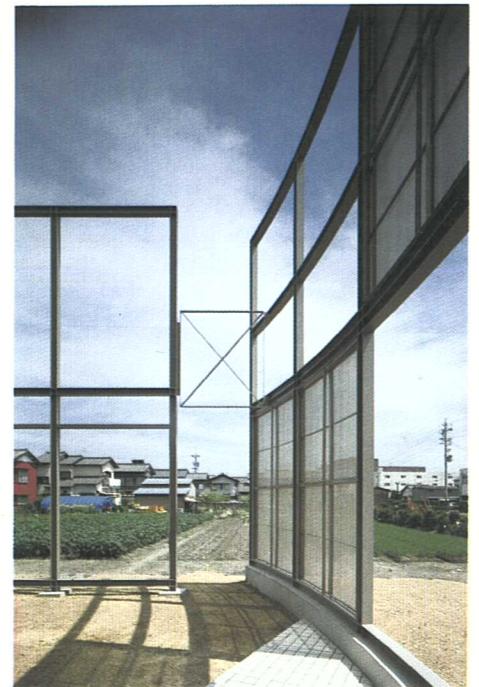
設計 入江一央+入江京
施工 住友建設



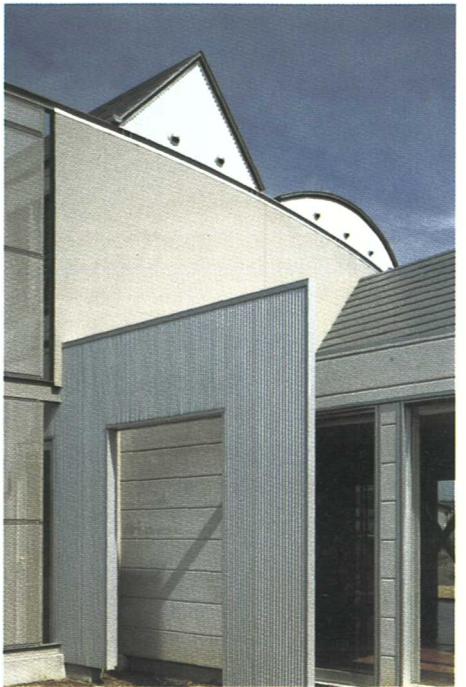
左頁 南側から見る 方形屋根の部分は玄関



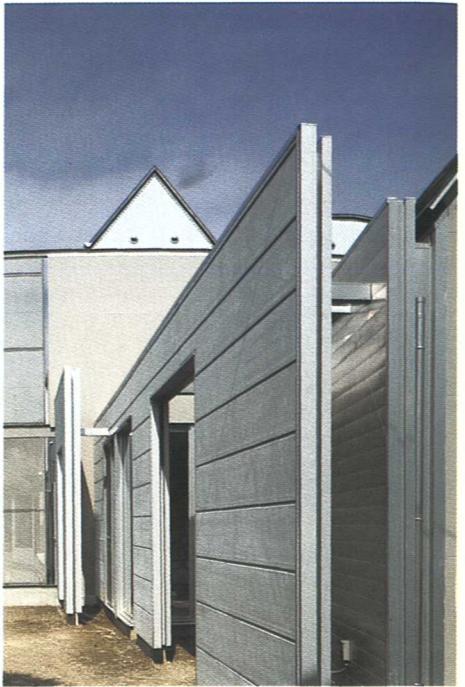
フレームは内部と外部をつなげつつアーティキュレートしている



フレームに囲まれた前庭部分



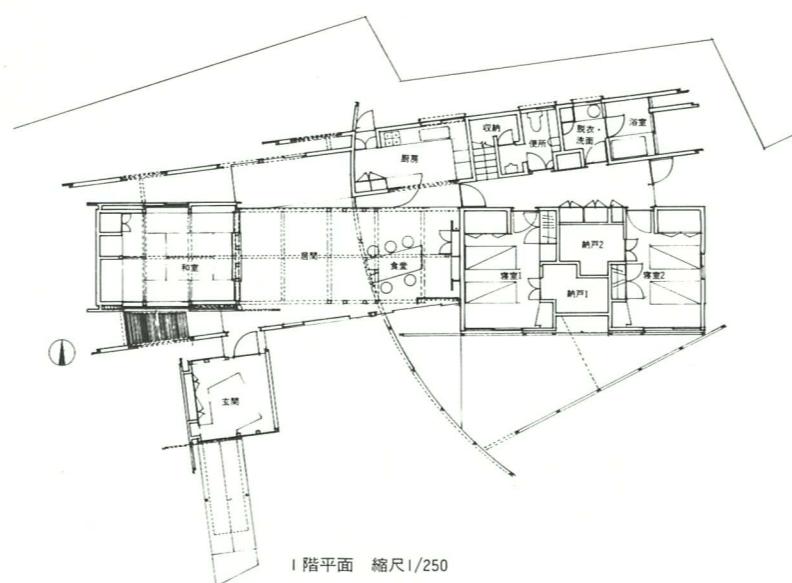
切妻屋根とヴォールト屋根が並列して載る



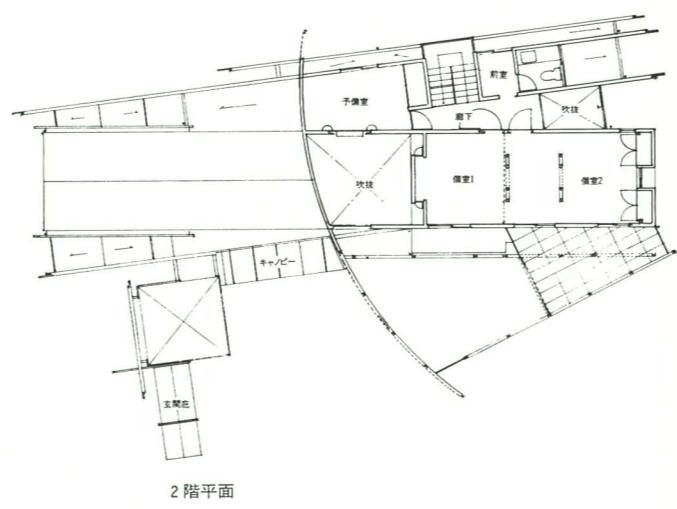
層状に重ねられた壁



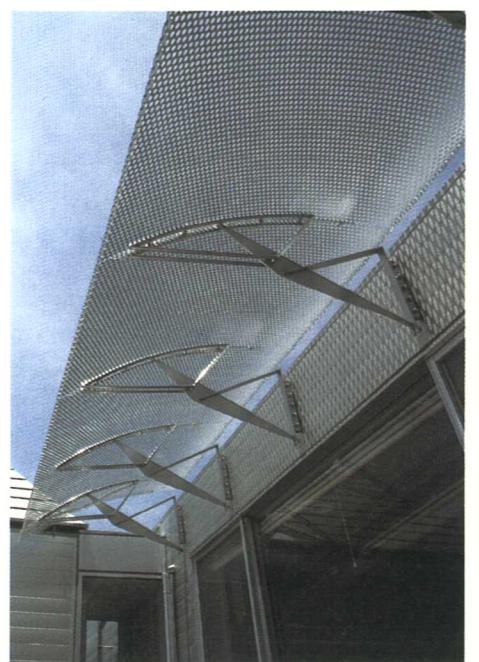
食堂 アーチのつけられたフレームが室内まで貫入していく



1階平面 機尺1/250



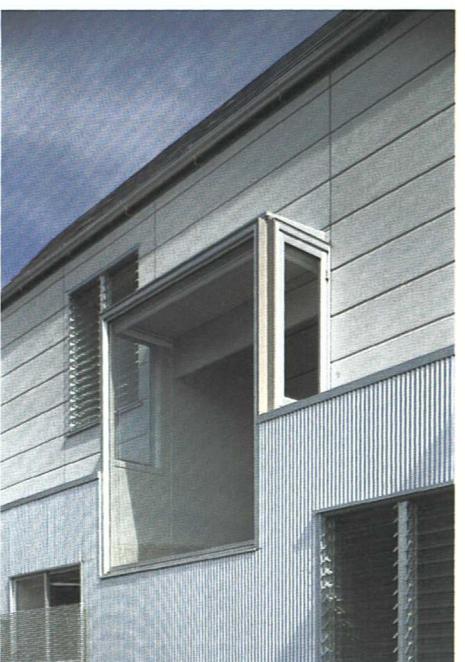
2階平面



居間の開口に架かるキャノピー



フレームのディテールワーク



3方向から採光する出窓



厨房の前から居間を見る 部屋を構成する壁と中に組み込まれた立体フレームは角度がずらされている

敷地は静岡市の市街から少し離れた地域にあり、都市化の波を受けてほとんど田畠も見られなくなっているが、施主は農業を生業としている。敷地内には母家と農事作業の倉庫が脇にあり、南側前面に田畠が広がっている。母家は将来用の倉庫として残し、旧来の倉庫を取り壊して、そこに2組の老夫婦と娘さんの5人家族のための住宅が依頼された。広がりのあるおおらかな敷地に立ったとき、伸びやかな開かれたシルエットを持つ住宅にしたいと思った。老夫婦のためのスペースを1階とし、必要な設備を付した個室を2階に配した。さらに、施主との話し合いを通して、

近所づきあいの関係を考慮したうえで、たとえばちょっとした立ち話ができる場所、一応のお客さんとして家内へ招く場所、そして正式にを迎えるための場所、さらに家族だけの生活が繰り広げられる場所というようなパブリックからプライバシーへの感覚的な位階を平面計画の中に与えることが図られた。すなわち、玄関は第一の場所として、 $3 \times 3\text{ m}$ の箱として本体から独立させ、東西に延びる大きなブロックを西から東へ各ゾーンに対応して客間（和室）、居間（洋室）、食堂と寝室として展開し、設備ゾーンは北側敷地に平行にシフトさせた。さらに、周辺との対応関係



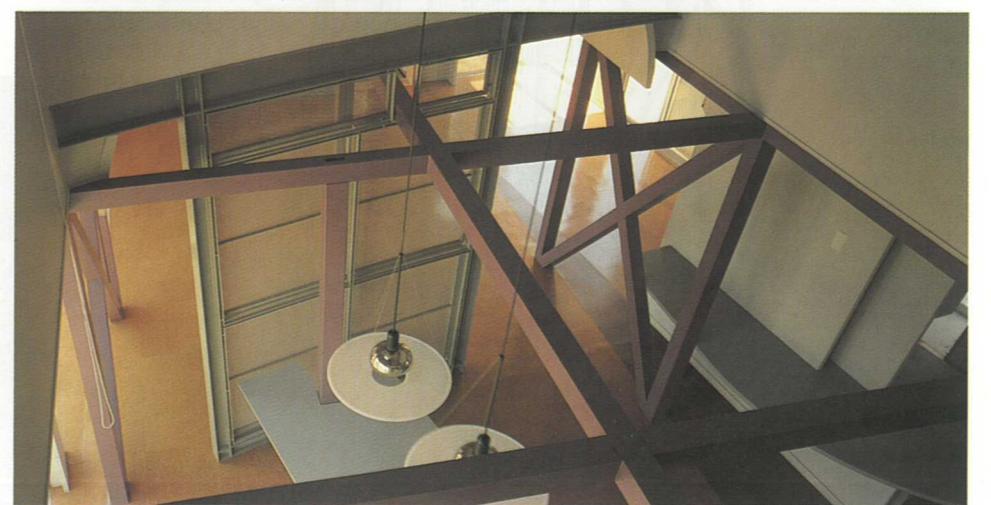
居間 奥の食堂とは外部から貫入するフレームによって柔らかく分けられている

の中で、また田園の中のびやかなシルエットの表現のために、何枚もの積層する壁が敷地を走り抜けているイメージをその配置に重ね合わせたかった。北側の敷地境界線に平行する壁系列は設備ゾーンを囲い込み、東西南北に走る、方位を指示する何枚もの壁系列は、大きなブロックを囲い込み、 15m 半径のR壁は家族ゾーンを切り分ける。そして、2枚の鉄骨格子のスクリーンがグレーチングの2階のベランダと組み合わさせて、前面の田畠と呼応する。寝室や個室からはそれらは外景を仕切る額縁である。また、それらは焼付け塗装のパンチングメタルの張られたRの鉄骨フ

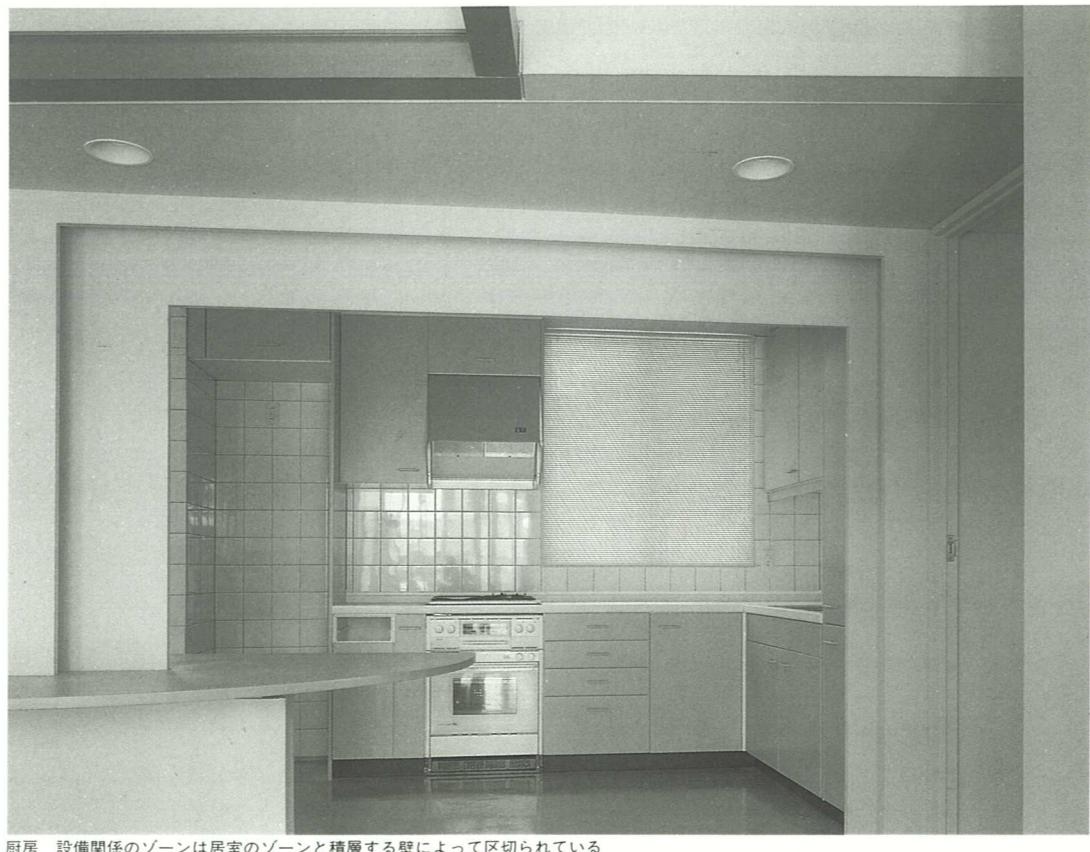
レームとジョイントすることによって、三角形状の空の空間を形づくり、建築本体と周辺との緑を囲い込んだクッションの役割を果たしてくれるだろう。この考え方は、居間の南側に取り付けられたステンレスの骨とアルミパンチングメタルによるRキャノピーに展開され、内と外の間にある曖昧な空間を少しでもつくり出す要素として考えられたものである。これは積層する壁と壁の間においても同様である。

時間とともに、緑豊かな環境の中に開放的で伸びやかな空間が生み出されることを願っている。

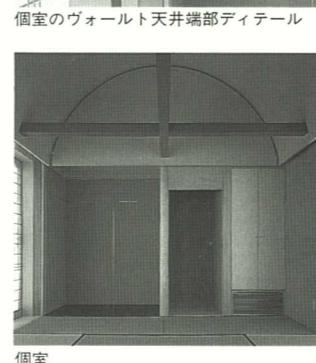
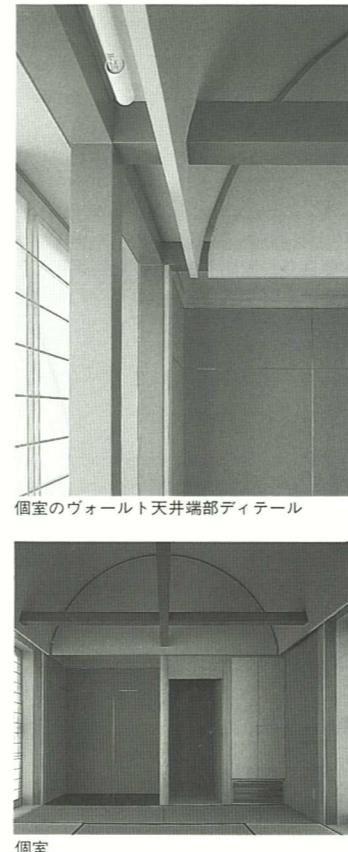
（入江一央）



食堂見下ろし 角度のずれた壁と立体格子



厨房 設備関係のゾーンは居室のゾーンと積層する壁によって区切られている

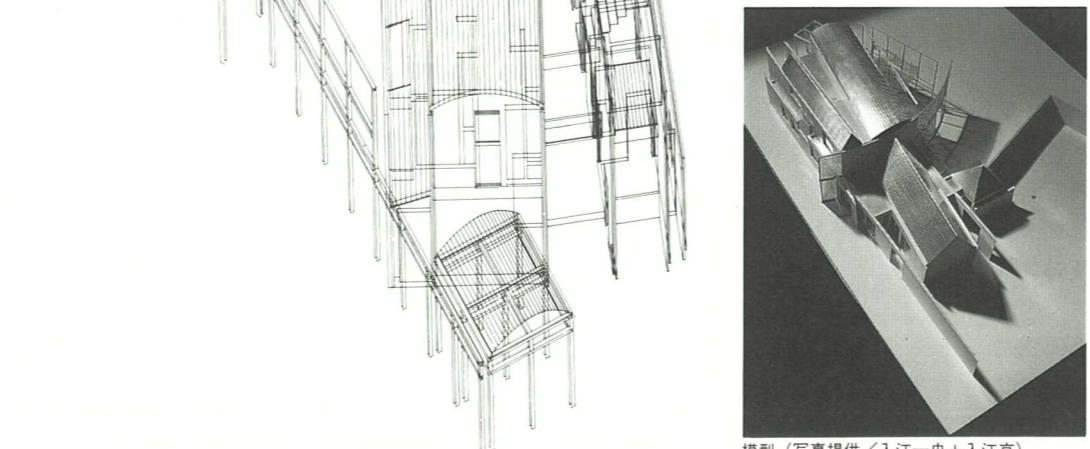


個室のヴォールト天井端部ディテール

個室

■〈内〉と〈外〉の間II／T邸
所在地 静岡県静岡市
主要用途 専用住宅
家族構成 夫婦2組+子供1人
設計
入江一央（正之）+入江京
構造 早稲田大学田中研究室
担当 田中弥寿雄 児玉恵一
施工
住友建設静岡支店 担当 小林五雄
木工事 原田工務店
担当 原田正信 大工 森田増一
金属建具工事 静岡アルミ 担当 徳山光男
木製建具工事 塚本建具店 担当 塚本尚兄
塗装工事 佐野塗装 担当 佐野行司
家具工事 田久店舗 田久雅俊
板金工事 長谷川板金店 担当 長谷川昭英
北村板金店 担当 北村栄康
鉄骨工事 渡辺鉄鋼所 担当 驚巣靖行
規模
地上2階 最高の高さ 7.10m
建築面積 168.56m²
延床面積 232.86m²
1階面積 168.56m²
2階面積 64.30m²

構造
主体構造 木造 一部鉄骨造
基礎 鉄筋コンクリート造
工程
設計期間 1989年1月～1989年5月
工事期間 1989年6月～1990年6月
法規・敷地条件
住居地域
外部仕上げ
屋根／表面処理亜鉛合金板サビナシルーフ
外壁／アルミスパンドレル 中空コンクリー
ト押出成型板（昭和電工） ガルバリ
ウム鋼板
開口部／アルミサッシュ
内部仕上げ
玄関
床／磁器質タイル
壁／PB⑦12寒冷沙バテ目止めVP
天井／PB⑦9寒冷沙バテ目止めVP
居間・食堂・個室
床／コルクタイル⑦ 食堂のみ床暖房
壁／PB⑦12寒冷沙バテ目止めVP
天井／PB⑦9寒冷沙バテ目止めVP 一部
ベニヤR加工寒冷沙バテ目止めVP
和室
床／畳敷き
壁／じゅらく
天井／ベニヤR加工寒冷沙バテ目止めVP
寝室
床／コルクタイル⑦
壁・天井／縦ベニヤOP
設備システム
空調方式／ガスヒートポンプマルチシステム
個別ヒートポンプマルチシステム
給湯方式／ガス給湯器
主な使用機器
空調機器／ヤマハGHP ダイキンエアコン
便器・洗面器等／TOTO
厨房機器／エスジーリビング
照明／ヤマギワ 山田照明 マックスレイ ナン
ヨナル
建築金物／オーシマ イネックス



模型（写真提供／入江一央+入江京）



佐藤浩司（国立民族学博物館助手）

かたちをつたえる インドネシア・ルネサンスの造形

そのとき私はレティ島からキサール島へ向かうプラフ（帆船）の上にいた。季節はすでに貿易風期に入り、15・16世紀の昔なら、モルッカ産のクローブやナツメグなどの香料を満載した船が、一路マラッカをめざしてこのあたりを航海していたに違いない。

東からの心地よい風にのってプラフは快調に波頭を乗り越えていた。それは東インドネシアのマルク（モルッカ）州南西部の海域に点在する島々で起きたささやかな出来事で、記念すべきプラフの名は、グヌン・スジャラ—歴史の山—といった。太陽の直射を避けるために帆のつくる日陰を求めて船室の屋根に腰掛けていたとき、キサール島の小学校で教師をする男から私が受けた質問は、島にある古い建物の調査がいったい何の役



スンバ島の慣習村タルン村（西スンバ県ワイカブバック）。高く飛び出した屋根の中には祖靈が祀られている。

